

PB-43.**急性心筋梗塞 (AMI) に対する RESCUECath™ の有効性の検討**

(八王子・内科学第二)

○大島一太, 内山隆史, 久野将宗, 寺本智彦,
喜納峰子, 並木紀世, 小松尚子, 五関義成,
宮城 学, 小林 裕, 笠井龍太郎, 豊田 徹,
永井義一

【目的】AMIの発症機序の1つに, 冠動脈においてプラークラプチャーに引き続き血栓が形成されることが知られている。そのため, t-PA を用いた血栓溶解療法や, RESCUECath™ を代表とする機械的血栓吸引療法を行うことが合理的な治療法といえる。

RESCUECath™ とは, カテーテル内に陰圧がかかる事により冠動脈病変部の血栓を機械的に吸引除去することができる新たな経皮的血栓除去カテーテルシステムである。今回我々は RESCUECath™ を施行したAMI患者において, 血栓溶解療法を先行したものと, しなかったものに分け, 吸引物の病理所見を比較検討した。

【対象】2000年8月1日から2001年3月31日までに当センターに入院したAMI患者のうち, RESCUECath™ を使用した21症例で, 血栓溶解療法を先行した4例(A群)と, 施行しなかった17例(B群)に分類した。

【結果】A群の1例で吸引物の病理組織はコレステロール結晶であったが, その他の症例ではA群, B群ともにフィブリン, 赤血球を主体とした新鮮血栓であった。

【結語】A群で初回冠動脈造影時TIMI 3 flowであっても, RESCUECath™ による吸引物の病理組織が血栓主体であることより, 血栓溶解療法後再開通した症例であっても RESCUECath™ の施行は意義あるものであると思われた。

PB-44.**skeletonized RA を用いた off pump CABG の2症例**

(霞ヶ浦・外科学第四)

○久田義也, 中野秀昭, 近沢元太, 箱島 明,
藤田聡子, 藤原靖之

今回我々は, skeletonized RA を用いた off pump CABG の2症例を経験したので報告する。

症例1は72歳男性で, 胸部不快感にて当院循環器内科受診。心臓カテーテルにてRCA #1: 90%, #3: 99%, LAD #7: 90%, LCX #13: 99%の3枝病変であった。待期的に off pump CABG (3枝バイパス: LITA → LAD, RA → CX, GEA → RCA) を施行。その際, 回旋枝までの距離が遠かった為, Radial artery を Harmonic scalpel を用いて skeletonize し, 十分なグラフト長を確保した上で吻合を行った。

症例2は71歳の女性で, 平成12年8月発症のOMI。心臓カテーテルにてLAD #6: 90%, #7dis: 90%, LCX #11: 90%の2枝病変であった。待期的に off pump CABG (2枝バイパス: LITA → LAD, RA → D1 → CX) を施行。この症例もCXまでの距離が長く, 症例1と同様に, Radial artery を Harmonic scalpel を用いて skeletonize し, 十分なグラフト長を確保した上で sequential 吻合を行った。

skeletonize 法の利点は, より長いグラフト長が得られる事である。また余分な組織がないため, kinking を起こしにくく, sequential 吻合も容易である。また早期開存も良好であった。グラフト採取時の損傷も Harmonic scalpel を用いる事により, 電気メス使用時に較べてはるかに軽減することができた。